

10月の野菜高騰で 輸入を誘引

10月は、東北・北海道産の終盤に加え、関東産が始まる月で潤沢な入荷が期待できるはず。しかし今年は夏秋野菜の台風・豪雨被害、さらに9月の日照不足で、10月の野菜は高騰した。品薄になれば、とくに加工業務用は輸入品にシフトする。そのため10月の生鮮野菜輸入量は約7万tで前年同月比13%増

と4カ月連続で前年を上回った。なかでもニンジン、レタス、ブロッコリーは前年比数倍に急増。一方、タマネギは豊作で前年を割り込み、需要期のネギは微増にとどまった。東京市場での2015年と16年の入荷統計を対比し、10月の高騰を振り返ってみよう。

レタス類

前年比48%高。夏秋産終盤に秋冬産の遅れ重なる

【概況】

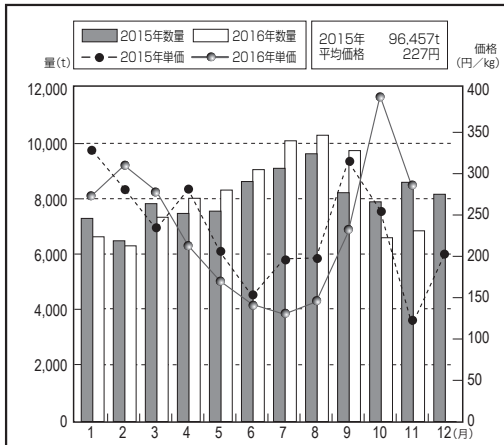
東京市場の16年10月の野菜全体の単価は316円。高騰気味だった9月に比べると17%高だが、前年比では33%も高い。レタス類（結球・非結球）では前年の48%も高騰した。9月と比べると入荷は32%も減り、単価では74%も急騰。こうした品薄・高騰に対応して、前年の4・6倍、約2400tのレタス類が輸入されたが、業務加工用中心であるため、東京市場へは期待値(200t)の1割、わずか20t程度の入荷である。

【背景】

興味深いことに11月に関しては、レタス類の単価は284円と3割も安くなった。入荷は若干増えていたこともあるし、10月の単価では小売店では高すぎて売れないこともある。ただし、前年同月比では2割少なく、単価は2倍近い。通常の年であれば10月は入荷数量が潤沢で安く買やすい時だ。いつもの年より1カ月遅れで11月に落ち着きが出てきた。そのために輸入品の市場入荷も各品目減少傾向。代わって11月定番のカボチャが急増している。

【今後の対応】

たしかに毎年10、11月は、東北・北海道の夏秋野菜と、関東の秋冬野菜が重なって出る切り替え時期であり、意外に数量も単価も不安定な時期である。16年は8月に夏秋産地が台風や豪雨などで少なく、9月には日照不足などで生育が遅れた。そのため10月には夏秋産地のもが終盤で少なく、関東産など秋冬産地で生育遅れが重なり、野菜は高騰した。これからレタス類は、主産地の茨城に加え、静岡や香川、福岡などの冬春物で安定してくるだろう。



ブロッコリー

10月の輸入は前年の2.8倍、道産・長野産が例年の半数

【概況】

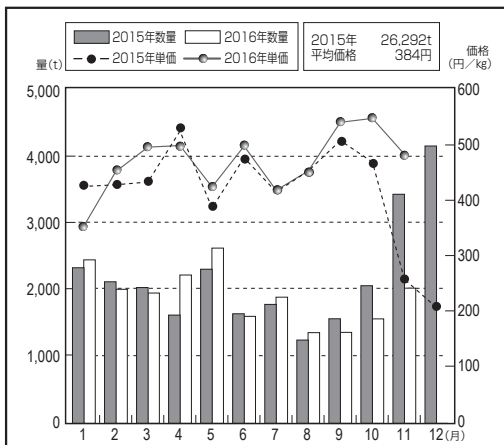
東京市場の16年10月の入荷は、9月に北海道産や長野産が少なく高騰した後を受けて、数量は前月より16%多かったものの、前年に比べると24%減って17%高かった。とくに北海道や長野が前年の半分程度しか出てこなかったことが大きく、関東の秋冬物の主産地・埼玉も出だしが遅かった。こうした状況から、10月の輸入が前年比2.8倍の3199tと大幅増。東京市場にも前年の1.5倍、188tの米国産が入荷している。

【背景】

16年のブロッコリーの入荷傾向は、夏場までは前年より多めが続いたが、本来、北海道産や長野産の終わりと関東産の初めまで増えていくはずの9月から、入荷のペースがガタンと落ちた。レタスのように加工業務需要はそれほど強くないのだが、国産が増えなかった分、輸入でカバーしようとしたのは、主にスーパーなどの量販店だったようだ。毎年、潤沢で安くなる10月に、安売り企画を立てていたため、数量確保が必要だったのだろう。

【今後の対応】

10月には、前年の半分ながら出荷していた北海道や長野は、11月には姿を消した。代わって本来ピークを迎えていないはずの埼玉産が10月には前年より2割減、11月には6割減であり、愛知産は予定どおり出てきたが数量が足りず、またもや米国産が前年同期の3倍、149tほど入荷している。10月11月は入荷もピークのはずだが、11月には入荷数量は前年対比で59%、単価は1.9倍と引き続き高値で推移した。冬場は愛知産中心に安定するだろう。



今年の市場相場を読む

単価2・3倍で輸入は2・6倍に急増、12月に不安も

ニンジン

【概況】

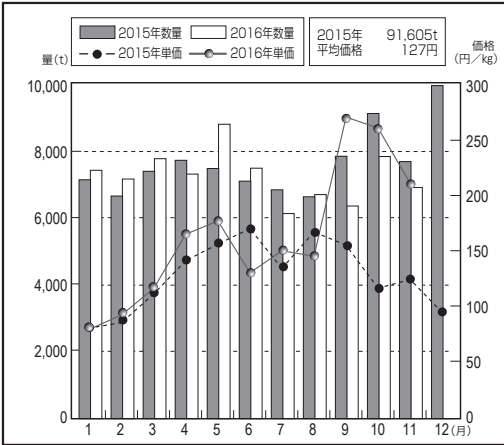
東京市場の16年10月の入荷は、9月より23%増えたものの、9割を占める北海道産が18%減で青森産が37%減。前年比では14%減、単価は2・3倍にもなった。そこで輸入されたニンジンは1万2059tと前年の2・6倍。東京市場には青森産の入荷量より多い534t、昨年の5・4倍の中国産が入荷した。通常、中国産は小売店向けには不人気だが、北海道産が品薄で高騰すると、加工業務用には中国産が必要だ。

【背景】

毎年10～11月にはニンジンは入荷のピークを迎える。北海道産の最後に、千葉産が本格出荷されてくるからだ。しかし、夏秋ニンジンの大産地である北海道産は16年、有史以来の台風の上陸回数に伴う度々の激しい豪雨で空前の大被害に見舞われた。意外に被害が大きくなかったタマネギのような品目もあるが、ブロッコリーやニンジンも酷かった。一方で、小売業界では10～11月といえば、イモ・タマ・ニンジンで煮物提案をする月だ。

【今後の対応】

10月は9月より増えたが、11月はやや減り単価も下げるのが例年のパターン。しかし年間で一番の需要ピークは12月。昨年は1万t近い入荷だった。しかし今年を中心となる千葉産が不作気味。普段は出してこない関東の中小産地や西日本の京都や岡山、香川などからの入荷で賄えるかどうか。12月という特別な月であることを考えると、入荷実績のない地方・市場からは無理だろう。一番「当て」になるのは中国産だ。16年は年間10万t突破するか。



ネギ

入荷5%減、単価34%高。年明けの入荷減が心配

【概況】

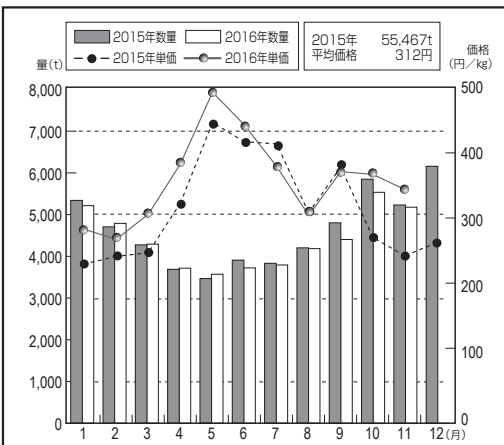
東京市場の16年10月は、前年同月比で5%少なく、単価は34%高い。10月はまだ青森、秋田、北海道が上位を占めるが、それら産地の入荷減を、始まった関東産がカバーしきれていない。10月は鍋野菜が本格化し、小売店の品ぞろえから一般家庭までの需要が増える。そのため業務加工用は輸入品の割合も高い時期だ。16年10月の中国産輸入ネギは3%増の5667t。うち東京市場には前年比5割増の262tの入荷があった。

【背景】

11月は東北から関東への切り替わり時期だが、16年は前年並みの入荷。だが、需要期でもあり他の野菜高につられて単価は「高保ち合い」である。12月は、年間でも最も入荷が多いが、11月の状況から見ると関東産地は潤沢に出荷してくるだろう。16年はなぜか、年明けから一貫して前年に比べて単価高で推移してきた。11月までの平均単価は前年より16%高い363円。とくに夏場以降の入荷推移は、10、11月まで前年を下回ったままだった。

【今後の対応】

ネギは、消費者向けは国産、輸入品は業務加工用に特化して「棲み分け」している。そんな背景があるせいか、国内各産地ともネギの生産意欲は強い。北海道と東北の天候被害で野菜全般が高値になるなか、10月のネギは暴騰という事態には至らなかった。関東の早い産地が出荷を意図的に前進化したこと、いつでも増減の融通が利く中国産という緩衝部分があるためだろう。早出しの関東産地が年明け以降、パテナイかが心配だ。



流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。